



紫雲児の心

「命」を大事に

校長 五十嵐 めぐみ

年度初めに引き続き、1学期終業式でも命の話をしました。私の体験（以下の内容）です。

5月のチャレンジウォーク前日、「甥が脳出血で倒れた」と連絡を受けました。救急搬送され、緊急手術をしてICUに入院しました。まだコロナウイルスの制限が続いていた時期で、血が繋がった家族しか面会できないと言われていましたが、5月4日に「早ければ今日中に息を引き取るかもしれない。会いたい人は病院へ来るように。」と連絡を受け、急いで病院へ駆けつけました。意識はなく、ICUでたくさんの機械をつながれている甥に、「頑張っ！子どもたちが待っているよ！」と声をかけましたが、反応はありません。その3日後、甥は幼い子ども2人と奥さんを残して旅立ちました。まだ38歳でした。生まれつき川崎病という病気で治療していましたが、すっかり健康になり、結婚して埼玉で家族と幸せに暮らしていました。「これから親孝行しなよ。」「そうですね。頑張ります。」と、数カ月前にも話していたところでした。

今から30年以上前、私の結婚式の翌々日に、それまで元気だった祖母が急逝しました。結婚式当日の朝、「体に気をつけて…」と笑顔で見送ってくれた祖母が、約40時間後には帰らぬ人となったのです。夫の実家で知らせを受けた時、私は夢を見ているような気分でした。夫の運転で私の実家に向かう間、涙が止まりませんでした。祖母の葬儀や四十九日が終わって少し経った頃、祖父が窓の外を見ながら、「ばあさんが歩いている。」と言うようになりました。祖父は亭主関白でいつも祖母に強く当たっていましたが、心の中では祖母を大切に思っていたのでしょう。最愛の妻をある日突然失ってしまった祖父はみるみる呆けて、自宅では介護できないほどに進行したため、施設に入所しました。その後はどんどん体も弱り、祖母の死から1年も経たずに、祖母の後を追うかのように逝ってしまいました。

元気だった甥が突然倒れ、数日後に亡くなってしまった時、30年以上前の祖父母のことを思い出した私は、残された甥の家族が心配でした。しかし、小学3年生の長女は、「パパ、今までいつも家族のことを考えてくれてありがとう。私たちは大丈夫だから、安心して天国へ行ってね。」と手紙を書き、棺に入れました。その手紙を読んだ私たち親族は涙があふれましたが、残された者たちが協力して遺族を支え、しっかり生きていこうと決意しました。

大切な人を突然失った時、人は心にぽっかり穴があきます。その穴（喪失感）は、決して埋めることはできません。私の祖母も甥も病気でなくなったのですから、それは運命で、どうすることもできません。しかし、世の中には、天寿を全うせずに、自ら命を絶ってしまう人もいます。死んでしまいたいほど辛いのですが、残された人はもっと辛いのです。苦労して育てた息子に先立たれた私の義姉は、「死ぬ人よりも、残された人の方が辛い」と言っていました。

4日前に、夫の伯母が93歳で亡くなりました。若い頃に病気を患ったために結婚せずずっと実家にいたので、夫にとってもう一人の母のような存在で、私も母として接していました。93歳で天寿を全うした伯母は、病気との闘いはあったものの、晩年はそれなりに幸せな人生だったと思います。一昨日、葬儀を終え、無事に見送ってきました。

命は、みんなにひとつずつしかありません。かけがえのない大切な命を大事にして、命の限り精一杯生きてください。自分の命も、他の人の命も、大事にしてください。

全国で水の事故も増えています。安全に留意し、自他のかけがえのない命を大事にして、充実した夏休みを過ごしてほしいと願っています。家庭・地域でも、見守りをお願いいたします。